

平成 25 年度学校評価(年間評価)

学校名	大分大学教育福祉科学部附属特別支援学校
-----	---------------------

前年度評価結果の概要	①授業及び指導計画において、高い評価を受けたものの、授業連絡カードの記述量や内容について改善が必要と指摘され、改善に取り組んだ。その利用する価値と作成する負担がアンバランスであるため、さらなる改善に取り組む。 ②進路指導に対する評価が低いため、特に小・中学部の保護者が子どもの将来をイメージできるような取り組みが必要である。特にキャリア教育の充実が求められる。 ③学校事故および津波などの災害に対する取り組みをさらに進め、安心・安全な学校づくりを進める。 ④学校HPの充実などの取り組みは一定の評価をうけている。さらに開かれた学校づくりのため、教育研究における情報発信に力を注ぐ必要がある。 ⑤学校における研究と他の学校のニーズとの差があり、地域のセンターとしての役割を十分に果たせていない。
------------	--

学校教育目標	中期目標	重点目標
個人の尊厳を重んじ、児童生徒一人一人の心身の発達に応じて、小学部、中学部並びに高等部の各課程を通して、調和のある一貫した教育を行い、自己のもつ能力や可能性を最大限に伸ばし、身近生活の確立をはじめ、集団生活、社会生活、職業生活への適応性を高め、自立的、主体的な生活ができる人間の育成をめざす。	1 安全・危機管理意識の重要性・日常性と校舎改修 2 研究・指導方法の改善 3 教材等の開発についての情報発信の継続 4 小学部・中学部・高等部の一貫した自立・社会参加に向けての指導の充実 5 特別支援教育のセンター的機能の充実 6 県との人事交流の適正化	1 安全・危機管理意識の重要性・日常性と校舎改修 2 一人一人の教育的ニーズを的確に把握し個別の指導計画をもとに指導実践・評価・振り返りを行い、確かな力をつける 3 職員一人一人が学校課題を意識し、学校組織として課題解決に取り組み、保護者・地域・関係機関・大学と共働・協働する

重点目標	達成(成果)指標	重点的取組	取組指標	PL SL	自己評価結果		次年度の改善策	学校関係者評価	
					評価	分析・考察			
1 安全・危機管理意識の重要性・日常性と校舎改修	○安全に配慮した学習環境が整えられており、子どもたちが落ち着いて行動している ○ヒヤリハット事例を共有し、同様の事案がおこらない ○年間を通じて、学校安全に関する計画的な指導がなされている ○校舎改修に伴う工事が、児童生徒の動線や安全に配慮したのものとなっている	○出席している児童生徒と教師の人数を確認し、危機がおきたとき、どのように対処するかシミュレーションする(特に校舎改修工事期間における取組を強化する) ○学校安全計画を活用し、学部ごとに設定した安全指導を行うとともに、日常的に安全に配慮した学習環境を設定する ○ヒヤリハット事例や全体ケース会議、個別ケース会議を定期的に設定し、すべての教員において情報を共有し、対応する	○すべての教員が、朝5分程度その日の活動を想定し、場面設定や行動を確認し、安全な学習環境を整えるとともに、緊急時における冷静な判断と対応ができるよう備える ○すべての教員が、授業計画を行う際、学部の安全計画を確認し、安全指導を行うべき内容の指導に留意し、あらゆる場面での指導すべき事項の設定および安全計画の見直しを図る ○軽微な事故に至らない事象を把握し、ヒヤリハット報告書を作成する ○ケース会議をすべての児童生徒に対し実施し、職員会議や全体ケース会議の場において報告し、情報の共有をする	PL:学部主事 SL:学部主事、学級主任 PL:保健主事、学部主事 SL:学級主任 PL:保健主事、生徒指導主事 SL:学部主事、学級主任	2	○職朝の際、その日の人員や児童生徒の出席状況について確認し、非常事態に備えた。また全員が毎日シミュレーションしていない。 ○職朝のある日が週に2日であり、毎日実施することが難しく、全員の出席でないため、意識の統一を行っていない。教師一人一人の危機に対する意識は高まっているものの、情報の共有が不十分なときがあり、伝達方法の改善が必要である。	○職朝を引き続き実施し、参加者全員で短時間のシミュレーションを行う。また、学部においても学級ごとに当日の日程を確認する時間をもち、想定される事故時の対応や学習環境の設定を見直す機会を毎日行う。	○安全に対する保護者アンケートでは、おおむね良いとの評価をうけた。特に施設の安全面に対し素晴らしいとの意見があった。 ○庭木の剪定がいきどろ環境に対する配慮がなされ、安全面でも配慮がなされている。 ○校舎改修準備に伴い、大きな環境の変化があり、生活しやすいとは言えない。大きな事故なく、工事を終えてほしい。 ○学校評議員の安全に関する項目の評価点は、平均3.5(満点は4)であり、良い評価であった。 ○安全に対する配慮は、環境整備などにおいてよい評価を受けた。 ○教師の心理的な安全に関する改善は不十分である。	
					2	○行事の実施計画において、緊急事態を想定した備えができていない。安全計画の活用という点では不十分であり、実施に際して常に意識できるまでには至っていない。 ○安全計画を常に意識する取り組みが不足しており、教師の安全計画に対する重要性の理解や活用できた時のメリットを感じることができていない。	○学校安全計画を確認する。見直しをする機会を毎月持つ。安全点検時にあわせて、学部の保健安全担当者が計画にそって指導が行われているか確認する。また、翌月の計画を確認し、実施予定を学部で提案し指導する。また養護教諭による安全指導も定期的に実施する。		○校舎改修準備に伴い、大きな環境の変化があり、生活しやすいとは言えない。大きな事故なく、工事を終えてほしい。 ○学校評議員の安全に関する項目の評価点は、平均3.5(満点は4)であり、良い評価であった。
					2	○ヒヤリハットを共有しようとする意識が不十分であり、報告すると面倒だという意識があると思われる。小さなミスを共有することが重大な事故を防ぐも効果的な方法であるということを強く認識し、報告することが学校全体の利益になるということを理解する必要がある。 ○ケース会議を実施している児童生徒は保護者のニーズに応えるあ形で行っている場合や関係機関との連携の必要性を感じたときに行われており、対処療法的な対応になっている。一見困りがなく、落ち着いていると思われる児童生徒には実施の必要がないという認識があると思われる。	○ヒヤリハット事例は学部に於いて必ず報告し、全体で共有すべき事案は職朝や職員会議等で確認する。報告書は、各学部の保健安全担当者が聞き取りし、現認者と一緒で作成にあたる。		○安全に対する配慮は、環境整備などにおいてよい評価を受けた。 ○教師の心理的な安全に関する改善は不十分である。
2 一人一人の教育的ニーズを的確に把握し個別の指導計画をもとに指導実践・評価・振り返りを行い、確かな力をつける	○すべての児童生徒を対象にしたケース会議が定期的実施され、児童生徒の教育的ニーズについて、保護者や関係者と共有している ○教育的ニーズに応じた指導内容を設定し、指導することにより、児童生徒が自己決定をして、積極的に周りがかかわりを持ち行動している ○児童生徒の障がいの特性や発達段階に応じた指導がなされている	○ケース会議を指導に活かし、児童生徒のキャリア発達を促す ○学校研究の充実を図り、公開研究発表会を実施するとともに、全国の動向を把握し、実践的指導力の向上を図る ○教育課程の見直しを行い、児童生徒の確かな「生きる力」を身につけられ、小学部・中学部・高等部の一貫性のある編成を行う	○一人の児童生徒に対し、1年に1回以上ケース会議が実施され、保護者・学校・関係機関とが同じ課題に向けた取り組みを行う ○公開研究発表会への授業づくりをとおして、一人一人の授業力の向上を図る ○教諭の一人一回果外研修、全員による県内授業研究会の参加をとおして、県内外の動向やニーズを把握し、学校研究に反映する ○7月に26年度の編成基本方針を決定し、2学期末までに教育課程の編成作業を終える ○教育課程編成担当者会議を実施し、指導の形態の考え方の一貫性を保ち、キャリア教育全体計画を見直す ○心理検査等のアセスメントを実施し、得られた結果を効果的な指導支援に役立てる	PL:生徒指導主事、学部主事、学級主任 PL:研究主任 SL:学部主事、分掌主任 PL:教務主任、生徒指導主事 SL:学級主任	2	○ケース会議を実施している児童生徒は保護者のニーズに応えるあ形で行っている場合や関係機関との連携の必要性を感じたときに行われており、対処療法的な対応になっている。一見困りがなく、落ち着いていると思われる児童生徒には実施の必要がないという認識があると思われる。	○ケース会議を行っている児童生徒は保護者のニーズに応えるあ形で行っている場合や関係機関との連携の必要性を感じたときに行われており、対処療法的な対応になっている。一見困りがなく、落ち着いていると思われる児童生徒には実施の必要がないという認識があると思われる。	○福祉事業所が作成するサービス等利用計画書作成会議と学校におけるケース会議を兼ねて行い、全員を対象にケース会議を実施する。○会議の内容を充実させ、会議結果を配発した指導を行う。 ○ケース会議と移行支援会議を一本化し、効率的で実行力のある運営を行う。	○個別の指導・支援に関する保護者へのアンケートでは、平均2.9であり、良いという結果であった。 ○学校評議員は、平均3.5であり、良いという結果であった。
					3	○7月に公開研を実施し、授業公開等を通じて授業力の向上をはかった。22名の教員が他県の附属学校に出向くとともに、県立支援学校の研究会に参加した。 ○2学期以降学部の重点改善事項に対し、計画的に取り組むをすすめ、実情に応じた教育課程の編成を行うことができた。	○授業公開の機会を教員の指導力を向上させる良い機会とするものの、ええ附属の教員として必要とされる資質の向上には不十分であった。多くの教員が他の学校の実情を知ることで見識が深まるとともに、多くの情報を得るとともに情報の発信ができた。	○研究における授業力向上の取り組みにおいて授業改善の具体的な観点と整理し、改善に活用する。 ○合理的配慮の具体的な取り組みを行うとともに積極的に他校の研究会に参加し、情報収集、情報発信に努めるとともに一人一案策をとおして学校全体の授業力を向上させる。	○保護者からはおおむね良いとの評価を得た。もつと個に応じた指導をしてほしいとの意見もあった。 ○学校評議員は、平均3.5の評価であり、毎回感激している、集中できない児童に対し、よく配慮がなされているという評価であった。
					3	○2学期以降学部の重点改善事項に対し、計画的に取り組むをすすめ、実情に応じた教育課程の編成を行うことができた。	○学部ごとの課題を分析し改善すべき重点となる指導形態を設定し、取り組みを行うことで効果的に効果的な改善を行うことができた。教育課程の改善という本校にとっては長年行われていなかったことの取り組みが行われた意義は大きい。	○自立活動における改善の課題が残っており、児童生徒の教育的ニーズに応じた教育課程の編成を計画的に行う必要がある。年度当初から教務主任、研究主任、学部主事を中心に自立活動検討委員会を実施し、計画的に改善に取り組む。	○研究校として取り組んだ研究成果を教育課程に取り入れ、引き続き先進的で充実した教育課程の編成に取り組んで欲しい。
3 職員一人一人が学校課題(子どもの育成と学校力の向上)を意識し、学校組織として課題解決に取り組み、保護者・地域・関係機関・大学と共働・協働する	○児童生徒が積極的にあいさつしている。集団の中で役割を果たしている。自分のすることを確実にし、やりがいを感じている ○各学部で各年齢段階に応じた卒業後の生活に必要な力(小:基本的な生活習慣の知識・技能が身についている中:集団行動の中で、自分の思いや意見を適切に表現する 高:働く意義について、理解を深め自分なりの価値観や勤労観を持っている)が身につけている ○教師一人一人が専門性の向上を目指した取り組みを行っている	○児童生徒の自主的、実践的な活動が行えるような集い活動及び学校行事の企画・運営を行う ○学部・分掌ごとに指導内容と小学部段階からのキャリア教育をより意識した取り組みをすすめる ○進路情報を積極的に発信し、キャリア発達に関する情報提供を行い、保護者や児童生徒の主体的な進路選択を促す	○児童生徒会を中心に会を進められるよう段階的な支援をおこなうとともに、児童生徒が計画の一部を担当したり、運営に協力する活動を取り入れる ○キャリア教育全体計画を活用し、各学部・学年における指導内容を確認し、具体的な指導を行う ○進路日より、メール配信、HPを活用した情報発信を強力に進めるとともに、保護者向けの講演会や座談会、情報交換会などを実施する	PL:特別活動主任 SL:学級主任 PL:教務主任、進路指導主事 SL:学部主事 PL:研究主任、教育実習主任 SL:学部主事	3	○児童生徒会役員が、集い活動などの場で全体の前に出て活動する姿が多く見られ、積極的に活動していた。	○校務分掌に特別活動部を設け、児童生徒会役員・代表委員会を実施し、役員の自主的な取り組みを図った。児童生徒会役員は、全体の場で自信を持って発言するようになり、日常の生活においても積極的にあいさつをするなどの成果があった。	○生徒会役員の取り組みから全員の児童生徒への取り組みとなるよう学級会活動やホームルール活動、自立活動などの時間を活用し、児童生徒がより積極的に学習する姿になるよう取り組む。	○児童生徒たちの自主的で自立的な活動の成果が表れており、以前に比べ子どもたちの声が聞こえる学校になったと評価を受けた。
					3	○進路指導部を中心に、月に1回保護者向けの研修会を実施し、高い評価を得た。キャリア教育全体計画は見直しを行った。	○進路指導部の取り組みは保護者の進路に対する関心を喚起し、ニーズに応じた取り組みとなり、多くの情報を得ることができ有意義であると高い評価を得ることができた。強力な積極的な取り組みが評価された。	○改善したキャリア教育全体計画の活用方法について再度検討し、具体的な指導とその効果を整理し、個別的教育支援計画とのつながりを明確にして評価する。	○保護者向けの研修会は大変良い取り組みである。保護者の進路に対する評価点が昨年度より向上した。 ○小学部段階からのキャリア教育が必要であり、保護者も同じ気持ちになれるようにすることが大切である。宿泊学習が好例であり、今後も継続してもらいたい。
					3	○公開研で指導案作成のとりくみを行った。教育実習事前研修会を実施し、指導の共通理解を図った。連携会議を1回おこなった。	○公開研究発表会の指導案作成だけでは、指導力向上の取り組みとしては不十分で、一人一人の力量に応じた身に着けるべき内容の整理が必要である。学部教員とは協同ではなく、連携し、役割を明確にして研究を進めるべきである。	○授業力向上の研修と新研究の中で、校内研修会や授業研究会をかさね、年度末に公開授業を実施する。県立特別支援学校との研究協力を行う。また大学との連携会議を定期的に実施し、新研究の実践を充実したものにす。 ○HPの刷新を行い、新たに「学部ページ」「研究のページ」「進路のページ」「PTAのページ」を作成し、情報発信をよりすすめる。	○取り組みの方法や内容は良い。研究の中身の指導力向上は当然である。結果を県内の特別支援学校に発信し、多方面から意見をもらって欲しい。